

# 令和6年度学校自己評価システムシート (県立浦和高等学校 定時制課程)

目指す学校像	社会的自立を目指し、未来を拓く誠実な青年を育成する
--------	---------------------------

重点目標	1 定時制の生徒に合致した「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業に組織的に取り組む。 2 地域の多様な人材等の外部教育力や支援制度を活用してコミュニケーション能力を育み、社会的な自立心を育成する。 3 組織的なキャリア教育・進路指導に取り組み、進路決定に導く。 4 組織的かつ計画的に、日々の教育活動を発信し、開かれた学校づくりを進める。
------	---

達成度	A	ほぼ達成(8割以上)
	B	概ね達成(6割以上)
	C	変化の兆し(4割以上)
	D	不十分(4割未満)

※学校関係者評価実施日とは、最終回の学校評価懇話会を開催し、学校自己評価を踏まえて評価を受けた日とする。

出席者	学校関係者	4名
	生徒	2名
	事務局(教職員)	7名

※ 重点目標は3つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目(年度達成目標を意味する。)は複数設定可。  
 ※ 番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

学 校 自 己 評 価							
年 度 目 標					年 度 評 価 ( 2 月 1 日 現 在 )		
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策
1	義務教育での授業で充実感を味わった経験が欠しく、学習内容が十分に身につけていない生徒が多く見られる。充実感や達成感を味わえるよう個に応じた指導と、自己評価しやすい授業を展開することで基礎学力を向上させ、生徒が学びを自分の生き方と関連付けられるよう組織的に取り組む必要がある。	①「主体的・対話的で深い学び」を目指した授業等の実践と改善に向けた取組状況 ②外部支援者を活用した細やかな学習支援	①ICTの活用などの工夫で分かりやすい授業や行事を展開しつつ、毎時や単元ごとに生徒自身が自己評価できるような授業等を実施する。この際、すべての授業等で評価の観点として授業等で学ぶことが生き方と関連することを意識させるものを設定する。 ②学習サポーターを効果的に活用する。	①アンケートの「授業への参加状況」、「授業の理解度」の肯定的意見が学期を追って向上したか。 ②アンケートの「学習サポーターがいるときの学習意欲」の肯定的な回答が7割以上か。	7月と12月にアンケート調査を行った。 指標①:「授業への参加状況」と「授業の理解度」の肯定的回答はそれぞれ、変化なしと増加であった。 指標②:学習サポーターがいるときの学習意欲」の肯定的な回答は68.5%であった。	A	調査では「授業理解」と「授業の集中」に比べ、「授業理解」と「将来の希望」の相関が低いと読み取れる。生徒が主体的に授業に取り組むためには「進路に必要な教科だから勉強する」だけではなく、「この授業を理解できたからこんな進路もいいな」となる授業の工夫が求められる。
2	成育歴や学習歴から生徒が抱える課題が多様であり、それらに対応しながら社会性を身につけさせることが求められている。外部教育力を活用したソーシャルスキルの育成が必要である。	①外部専門家と連携した様々な状況の生徒に対応できる体制の構築 ②教育活動における各種教育支援の活用と環境整備	①スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーと連携し、個別面談やケース会議等を実施する。 ②多様な文化的背景を持つ生徒への対応のため、日本語支援員の活用がより効果的となるよう環境を整備する。	①専門職のアドバイスを参考にした、時期・状況に適した面談を展開したか。また、定期的な生徒情報交換会を実施したか。また、アンケートの「人間関係」の肯定的意見が8割以上か。 ②始業前の日本語勉強会への参加率は向上したか。また、環境を整備したか。	指標①:専門職を交えた面談を年間計画に沿いつつ臨機応変に実施した。教員間はほぼ毎週情報共有した。また、「人間関係」の肯定的回答は97.2%であった。 指標②:日本語勉強会への参加は生徒によるバラツキが多かった。オンラインでは毎回部屋を用意した。また、次年度に向け日本語を教育課程に組み入れた。	A	専門家や外部機関と連携した支援は今年度同様維持しつつ、多様な文化的背景を持つ生徒の支援を充実させるため、特に、教育課程に組み入れた日本語授業の研究と実践が重要である。
3	様々な理由により生徒の進路に対する意識は低く、将来の夢ややりたいことを見つけれない状況がある。生徒の進路支援を充実させ、意識の向上を図るとともに、将来の夢や具体的な目標を持たせるべく様々な挑戦の機会を作り、進路実現につなげる。	①「浦定チャレンジ」の活用 ②4年間を見通した体系的なキャリア教育・進路行事の設定と実施による進路意識と進路決定率の向上	①「浦定チャレンジ」の活用を機会あるごとに促す。 ②進路指導計画を全教員で共有しつつ、外部機関を活用したキャリア教育を推進し、社会体験活動や職業体験、卒業生による進路講演会を実施する。	①アンケートの「浦定チャレンジ」を8割以上の生徒が記述したか。 ②アンケートの「進路意識向上」の肯定的意見が7割以上か。また、就業体験した生徒が半分程度いたか。	指標①:「浦定チャレンジ」は全生徒が目標設定しそれ向けそれぞれのペースで取り組んだ。 指標②:「進路意識向上」の肯定的回答は77%であった。また、就業体験としてアルバイト実施者が53.5%(11/30現在)、1~3年次進路見学会で就業現場を見学した。	A	「浦定チャレンジ」の内容は、低学年が授業や学習に関するものが多く、高学年は進路希望の実現に関するものが増える。授業が進路や自身の生き方とどうつながるかを低学年から自覚できるような指導をすることで、進路選択の幅を広げていきたい。
4	保護者会の開催方法や教育活動を発信する体制が新型コロナウイルスの猖獗により分断され、その機能が十分には回復していない。ICT機器が教育で急速に普及してきたことも踏まえ、本校の活動や魅力を効果的に発信する工夫が必要である。	①保護者を始め誰もが見やすい学校からの情報発信サイトの研究と作成 ②保護者参加型の行事企画と積極的な情報提供	①学校HPを含めた情報発信メディアの見直しを行い、行内体制を整えることで積極的な情報発信をおこなう。 ②保護者参加の行事の実施により、本校の教育活動への理解を深めてもらう。	①情報発信の方法を工夫したか。また、発信の回数は50回以上か。 ②保護者会参加者アンケートでの肯定的意見が8割以上か。	指標①: SNS を用いた情報発信を研究したが、今年度は例年通りの発信方法であった。また、行事、給食、生徒募集など55項目を発信した。 指標②: アンケートで「よかった」の選択率は、保護者懇談7割、授業参観6割、給食試食会5割であった。	B	アンケートによると、子供の学校での状況を知る方法として、子供の話が9割、教員からの連絡と学校だよりなどのプリントが共に7割であった。保護者は対話や紙媒体による方法で情報を得ている割合が高いようであり、次年度はこれも踏まえ、ICTでこれらを補完しさらには置き換えられるよう情報発信の研究を進めたい。

学 校 関 係 者 評 価	
実施日	令和7年3月19日
学校関係者からの意見・要望・評価等	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・指標①について、前後の変化だけではなく他の項目と同じよう00に具体的な数値を知ることができたほうが分かりやすいのではないかな。</li> <li>・不登校に対するプログラムなど個に応じた対応は、生徒の様々な事情の把握、関係機関との役割分担や連携などがあり、難しさがあるのだなと感じた。</li> <li>・少人数であることは、一人ひとりを丁寧に見てもらえるので保護者にとってはありがたい。が、学校教育という広い捉え方をすると生徒がもう少し多いほうがよいのではと感じる。在校生とその保護者のためにも何かしら対策を立ててほしい。</li> <li>・ホームページでの情報発信は努力していることがうかがえる。</li> <li>・小学校では、学校から保護者宛の手紙を配布した際に、その旨が通知され保護者が閲覧できるアプリを使っているところもあるので参考になるのではないかな。紙からオンラインに変えるのは、保護者にとっても良いのではないかな。</li> <li>・PTA活動が盛んになってきているように感じている。もっと保護者の声を聴く機会を増やしてもよいと思う。</li> </ul>	